

語りかける像

空いた椅子の隣で両手を握りしめ、決意を新たにした少女。沈黙を破りたいと考えている。兵士を体で「慰める」ために存在した女性たち。アジア太平洋戦争（1931-1945）中に行われた「慰安婦」に対する犯罪、について話す覚悟があります。彼女と一緒に座って、話を聞いてみませんか？

朝鮮出身の金順徳（キム・スンドク）さんは 17 歳のとき、日本人看護婦の募集に釣られ、数年間「慰安所」で過ごし、1940 年に脱走した。ジャワ島出身のマルディエムさんは、13 歳のときにボルネオ島での演劇公演に参加することを約束された。しかし、彼女も結局は「慰安所」に連れて行かれた。台湾のツァイ・ファン・メイさんも、日本兵に拉致されたときは 13 歳だった。昼間は兵舎で炊事や掃除をし、夜は花蓮の洞窟で日本兵の「慰安婦」として奉仕させられた。

シエン・チョン・ア・マーさんは、「性奴隷になったその日に、私の人生は終わったと考えたことがよくあった。」と苦しみ語る。誰にも知られてはいけない虐待を受けた彼女は、同じ境遇の友人と山へ行き、泣いたそうだ。

戦後、日本政府が否定政策の一環として、ほとんどの資料を破棄してしまったこともあり、被害者の数を把握するのは難しい。広島大学の田中利幸（歴史学者）は、およそ、8 万人から 10 万人の「慰安婦」がいたと話す。これは、1 人の「慰安婦」が平均 35 人の兵士を毎日「慰安」しなければならなかったことを意味する。そして今日に至るまで、日本の右翼保守は、「慰安婦」は強制されることなく、自発的に「慰安所」に入ったと主張している。

その半数以上は、採用時に未成年だった。シエン・チョン・ア・マさんは、あまりに若かったので、性交渉が妊娠につながることを拉致当時は知らなかったと述べている。流産や中絶を経験する女性も少なくないが、妊娠したらとって、性暴力から逃れることは出来なかった。終戦後、多くの「慰安婦」が銃殺されたが、生き残った人々は地域社会から勘当されないよう沈黙を守った。

1990 年になって、韓国を皮切りに、「慰安婦」の尊厳と、戦争における性暴力に反対する国境を越えた運動が形成された（The Korean Council）。1991 年、元慰安婦の金学順（キム・ハクスン）さんによるテレビ演説をきっかけに、多くの女性たちが証言するようになった。長い沈黙が破られたのだ。

1992 年以來、毎週水曜日にソウルの日本大使館前で、『The Korean Council』の主導でデモが行われ、今日に至っている。デモ隊の目的は、日本軍が与えた「慰安婦」とその苦しみを公式に認めさせることだ。



© Stefan Hopf

韓国のアーティスト、キム・ソギョンとキム・ウンソンの夫婦がデザインした平和祈念像。



© Pudmaker / 2012 년 개천절 수요시위 / CC-BY-SA-3.0
ソウルの平和像は、水曜日になるとデモ参加者の大切な集合場所となる。

2011年、ソウルにて『慰安婦像』が設置された。幼い少女、空いた椅子。こぶしを強く握りしめている。韓国で毎週水曜日にデモ隊を支えているブロンズ平和像は、韓国のアーティスト、キム・ソギョンとキム・ウンソンの夫婦がデザインしたものだ。今、あなたが隣に座っている平和祈念像のように、私たちは過去に目を背けてはならないということを語りかけている。

金学順（キム・ハクスン）氏は「あの時のことを思い出すたびに、胸騒ぎがし、今でも恐怖を感じている」と語るように、被害者にとっては辛い記憶となっている。しかし、辛い記憶こそ忘れてはならない。このような記憶があるからこそ、人々は苦しみを語ろうとするのであり、繰り返さないために後世に残さなければなりません。そして、回想の文化の一部となること、これこそがまさにこの像が望んでいることなのです。女性に対する暴力と戦争犯罪の記念碑。歴史は変えられない、声は抑圧できない、という事実の記念碑である。

このような抑圧された声に耳を傾けることが、私たちの関心ごととなるのだ。しかし、この歴史と向き合おうとする時、日本政府が私たちを敵視し、設置された像を撤去しようと試みる。例えば、2020年9月にベルリンに平和祈念像が設置されて以降、この像を残すべきかどうかという議論が続いている。日本の外交政策による圧力で、すでにドイツの他の公共の場所での平和祈念像のさらなる設置は阻止されている。

ライブツィヒでも、私たちは永久ブロンズ像の設置に失敗しました。今日、彼女の隣に座り、この歴史を考えてみてはいかがでしょうか。今も忘れてはならない過去がここにある。

– This translation is based on an older version of the German text, which has since been revised. We apologize for any inconvenience caused. –

Korea-Verband e.V. (n.d.). *Biographien von Zeitzeuginnen*. <https://www.koreaverband.de/trostfrauen/zeitzeuginnen/> (Zugriff am 14.05.2022).

Han, N. J.-H. (Hrs.) (2019). *Überlebende brechen das Schweigen: Katalog anlässlich der Dauerausstellung Die „Trostfrauen“ und der gemeinsame Kampf gegen sexualisierte Gewalt, im Rahmen des Museumsprojekts MuEon DaEon*, Berlin: Korea-Verband e.V.

Mladenova, D. (2022). *The Statue of Peace in Berlin: How the Nationalist Reading of Japan's Wartime "Comfort Women" Backfired*. 20(4), <https://apijif.org/2022/4/Mladenova.html>.

Nishino, R. (2020). *Forcible Mobilization*. In R. Nishino, P. Kim & A. Onozawa (Hrs.), *Denying the comfort women: The Japanese state's assault on historical truth*, 40–63. New York & London: Taylor & Francis, <https://doi.org/10.4324/9781315170015>.

Tanaka, Y. (2019). *War, Rape and Patriarchy: The Japanese Experience*. In G. Zipfel, R. Mühlhäuser, & K. Campbell (Hrs.), *In Plain Sight: Sexual Violence in Armed Conflict*, 30–51. New Delhi: Zubaan Academi.

Yoshimi, Y. (2003). *Das Problem der „Trostfrauen“*. In S. Richter & W. Höpken (Hrs.), *Vergangenheit im Gesellschaftskonflikt. Ein Historikerstreit in Japan* (97–117). Köln: Böhlau.